

1 自己評価及び外部評価結果

【事業所概要(事業所記入)】

事業所番号	4391200187		
法人名	社会福祉法人 峇州福祉会		
事業所名	グループホーム純心苑		
所在地	熊本県上天草市大矢野町登立1426-4		
自己評価作成日	令和5年2月12日	評価結果市町村受理日	令和5年12月17日

※事業所の基本情報は、公表センターページで閲覧してください。(↓このURLをクリック)

基本情報リンク先	http://search.kaigo-kouhyou-kumamoto.jp/kaigosip/Top.do
----------	---

【評価機関概要(評価機関記入)】

評価機関名	特定非営利活動法人 あすなる福祉サービス評価機構		
所在地	熊本市中央区南熊本三丁目13-12-205		
訪問調査日	令和5年3月1日		

【事業所が特に力を入れている点・アピールしたい点(事業所記入)】

車の通りが多い国道266号線沿いに面しており近くには海や娯楽施設もあり、大変賑やかな環境下に当施設はある。コロナ禍で最近では外出する機会も以前より減っているが、海岸沿いをドライブしたり風景を楽しんでいる。また、入居者様の個性を活かした生活環境、生活リズムを尊重して楽しく毎日をすごせるように支援ができるように努めている。周りには系列である有料老人ホーム、デイサービス、また同建物1階にグループホームもあり交流ができる環境である。

【外部評価で確認した事業所の優れている点、工夫点(評価機関記入)】

開設から数年を迎えたホームは地域に貢献した医療機関の既存の建物内を大幅に改修し、外観からは想像もつかないほど快適に過ごせる空間が出来ている。入居者と職員の自然体での暮らしは家族や地域から見守られ、差し入れの食材を日々の食事に活かしたり、入居者自身が魚さばきを披露して手料理を振舞われるなど、自宅の延長としての暮らしが継続されている。自らもまた同地域に住み、法人の運営者としてホームに関わる代表者は職員の手助けになればと地域掃除や活動に率先して関わり、アットホームな運営展開を示している。コロナ禍にあっても社会の状況を見て運営推進会議を直接開催とし、行政や地域代表者と顔を合わせ、忌憚のない意見や提案をホーム運営に反映させながら良好な関係を築いている。「外気浴を兼ね、玄関前に椅子を並べて通りを歩く人々との挨拶や車の往來を見るだけでも、外出に代わる十分な支援ですね!」との推進会議メンバーの言葉通り、できる事を最大に発揮しホーム生活の充実を図っている。

V. サービスの成果に関する項目(アウトカム項目) ※項目No.1~55で日頃の取り組みを自己点検したうえで、成果について自己評価します

項目		取り組みの成果 ↓該当するものに○印		項目		取り組みの成果 ↓該当する項目に○印	
56	職員は、利用者の思いや願い、暮らし方の意向を掴んでいる (参考項目:23,24,25)	○	1. ほぼ全ての利用者の 2. 利用者の2/3くらい 3. 利用者の1/3くらい 4. ほとんど掴んでいない	63	職員は、家族が困っていること、不安なこと、求めていることをよく聴いており、信頼関係ができている (参考項目:9,10,19)	○	1. ほぼ全ての家族と 2. 家族の2/3くらいと 3. 家族の1/3くらいと 4. ほとんどできていない
57	利用者と職員が、一緒にゆったりと過ごす場面がある (参考項目:18,38)	○	1. 毎日ある 2. 数日に1回程度ある 3. たまにある 4. ほとんどない	64	通いの場やグループホームに馴染みの人や地域の人々が訪ねて来ている (参考項目:2,20)	○	1. ほぼ毎日のように 2. 数日に1回程度 3. たまに 4. ほとんどない
58	利用者は、一人ひとりのペースで暮らしている (参考項目:38)	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	65	運営推進会議を通して、地域住民や地元の関係者とのつながりが拡がったり深まり、事業所の理解者や応援者が増えている (参考項目:4)	○	1. 大いに増えている 2. 少しずつ増えている 3. あまり増えていない 4. 全くない
59	利用者は、職員が支援することで生き生きとした表情や姿がみられている (参考項目:36,37)	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	66	職員は、生き活きと働けている (参考項目:11,12)	○	1. ほぼ全ての職員が 2. 職員の2/3くらいが 3. 職員の1/3くらいが 4. ほとんどいない
60	利用者は、戸外の行きたいところへ出かけている (参考項目:49)	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	67	職員から見て、利用者はサービスにおおむね満足していると思う	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない
61	利用者は、健康管理や医療面、安全面で不安なく過ごせている (参考項目:30,31)	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	68	職員から見て、利用者の家族等はサービスにおおむね満足していると思う	○	1. ほぼ全ての家族等が 2. 家族等の2/3くらいが 3. 家族等の1/3くらいが 4. ほとんどできていない
62	利用者は、その時々状況や要望に応じた柔軟な支援により、安心して暮らしている (参考項目:28)	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない				

自己評価および外部評価結果

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
I.理念に基づく運営					
1	(1)	○理念の共有と実践 地域密着型サービスの意義をふまえた事業所理念をつくり、管理者と職員は、その理念を共有して実践につなげている	理念を基本に、難しい対応に迷った時は理念に立ち返りみんなで共有して支援に繋げている	4項目からなる理念は法人の人としての尊厳を尊重するといった思いを受け継ぐとともに、その人らしい暮らしを支える内容となっている。職員は入居者のこれまでの生活を尊重しながら、一人ひとりの思いに寄り添い、ホームでの新たな生活を支えていくよう連携を図っている。	職員は課題に直面した時に理念に立ち返るなどケア指針として大切にしている。今後は家族や運営推進会議でも発信したり、地域密着型事業所として地域における役割や関わりを加える等見直しも検討願いたい。
2	(2)	○事業所と地域とのつきあい 利用者が地域とつながりながら暮らし続けられるよう、事業所自体が地域の一員として日常的に交流している	運営推進会議等を通じて、地域との繋がりを強くしたいと考えているが、コロナウイルス感染症の収束が難しく交流はできていないが、委員の方より差し入れ等あっている	運営推進会議のメンバーでもある地域代表者とは普段から交流があり、食材や輪投げなどの手作り品を持参された際には、「何かいるものはないかい？」と声をかけてもらうなど関係性が出来ている。感染症の状況を見て地域資源を活用したドライブや花見学などに出かけ、清掃活動には代表者自らが参加している。	地域の高校に福祉課があるとのことであり、将来の福祉を担う学生に実習の場として提案するなどの取組にも期待したい。
3		○事業所の力を活かした地域貢献 事業所は、実践を通じて積み上げている認知症の人の理解や支援の方法を、地域の人々に向けて活かしている	運営推進会議の委員の方に地区の方が多く情報の交換はできており、助言・相談も受けている。又、電話での問い合わせに認知症に関する質問に対して説明等を行っている	/	/
4	(3)	○運営推進会議を活かした取り組み 運営推進会議では、利用者やサービスの実際、評価への取り組み状況等について報告や話し合いを行い、そこでの意見をサービス向上に活かしている	年間6回(2ヶ月に1回の開催)の運営推進会議を実施している。実績、現状の報告を行い、各委員からのアドバイスを受けサービス向上に活かしている	運営推進会議は感染症の拡大に配慮して12月には書面審議としたものの、他は直接開催が実現している。入居者の活動状況や事故、職員研修などについて報告し、参加者からの意見をホーム運営に反映させている。会議には家族のだれもが参加できるようにしていたが、コロナ禍のおり1名ずつ順番に来所してもらっていることとしている。	災害について地域との合同訓練の必要性を感じており、今後運営推進会議を活用し参加者や家族と訓練を実施することも良いと思われる。

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
5	(4)	○市町村との連携 市町村担当者と日頃から連絡を密に取り、事業所の実情やケアサービスの取り組みを積極的に伝えながら、協力関係を築くように取り組んでいる	市の担当者と電話や運営推進会議への出席での会話・相談ができています	行政担当者の運営推進会議への参加により、ホームの現状を見てもらい、情報を共有している。職員の入居者支援に対する評価や事故報告についての意見などを受けている。外部評価について相談にのってもらい、認定調査時の立会いには状況をわかりやすく伝え対応している。	
6	(5)	○身体拘束をしないケアの実践 代表者および全ての職員が「介護指定基準における禁止の対象となる具体的な行為」を正しく理解しており、玄関の施錠を含めて身体拘束をしないケアに取り組んでいる	現在1名身体拘束(センサーマット)している。3ヶ月に1回身体拘束廃止委員会での廃止に向けての話し合いをしている。昼夜問わず入口のドアも施錠しているのが現状	身体拘束適正化委員会を立ち上げ3か月ごとに話し合いの機会をもっている。交通量の多い公道に面していることから、玄関は施錠しており、施錠に至った理由などについては運営推進会議の中で報告している。管理者は言葉使いについて入居者に馴染みのある天草(大矢野)弁で対応しているが、時に強く聞こえる場合もあるとしてスピーチロックにつながらないように注意したいとしている。	今後はチェックシートなどで自己を振り返る機会をもつことも必要と思われる。検討願いたい。
7		○虐待の防止の徹底 管理者や職員は、高齢者虐待防止関連法について学ぶ機会を持ち、利用者の自宅や事業所内での虐待が見過ごされることがないように注意を払い、防止に努めている	勉強会等を通して学んでいる。虐待については注意を払って防止に努めている		
8		○権利擁護に関する制度の理解と活用 管理者や職員は、日常生活自立支援事業や成年後見制度について学ぶ機会を持ち、個々の必要性を関係者と話し合い、それらを活用できるよう支援している	現時点では利用されている方はおられないが、必要な場合は説明を行っている		
9		○契約に関する説明と納得 契約の締結、解約又は改定等の際は、利用者や家族等の不安や疑問点を尋ね、十分な説明を行い理解・納得を図っている	契約締結時は十分な説明を行い、理解していただけるようにしている。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
10	(6)	○運営に関する利用者、家族等意見の反映 利用者や家族等が意見、要望を管理者や職員ならびに外部者へ表せる機会を設け、それらを運営に反映させている	運営推進会議にも家族の代表の方にも参加していただき、また、管理者にも直接要望等を言われることもある	入居者の意見や要望は改まって聞くのではなく、入浴中や一緒に何かをしながら自然な形で思いを引き出すようにしている。居室も形状や使い勝手に合わせ、入居者の身体状況を考慮して決めるようにしている。家族にはホームだより(じゅんしんえんしんぶん)で日常の入居者の様子を伝え、運営推進会議や面会時、電話などで意見をもらうようにしている。	
11	(7)	○運営に関する職員意見の反映 代表者や管理者は、運営に関する職員の意見や提案を聞く機会を設け、反映させている	毎月一回職員会議を行っていて、利用者様の情報の共有をおこなっている。月に2回管理者会議に職員などの意見を繁榮している	スタッフ会議はケア会議を兼ねており、入居者の現状を共有し、それぞれが支援に反映させている。業務改善に向けた意見には、朝のシーツ交換のスタートをもう少し早くから始めたらどうか？などの提案も出ている。希望休への対応や有休取得の声掛けなど職員が働きやすい環境整備に努めている。	
12		○就業環境の整備 代表者は、管理者や職員個々の努力や実績、勤務状況を把握し、給与水準、労働時間、やりがいなど、各自が向上心を持って働けるよう職場環境・条件の整備に努めている	シフト作成時には希望休を聞き、必要な休日は確保するようにしている。勤務状況に関しては常時、気にかけて相談を受け希望に沿うよう努力している		
13		○職員を育てる取り組み 代表者は、管理者や職員一人ひとりのケアの実際と力量を把握し、法人内外の研修を受ける機会の確保や、働きながらトレーニングしていくことを進めている	毎月、同建物事業所(桃)寿苑と1年間の勉強会のテーマを決め実施している		
14		○同業者との交流を通じた向上 代表者は、管理者や職員が同業者と交流する機会を作り、ネットワークづくりや勉強会、相互訪問等の活動を通じて、サービスの質を向上させていく取り組みをしている	同建物1階のグループホーム桃寿苑と合同で敬老会を行ったりしている		

自己	外部	項目	自己評価		外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容	
Ⅱ.安心と信頼に向けた関係づくりと支援						
15		○初期に築く本人との信頼関係 サービスを導入する段階で、本人が困っていること、不安なこと、要望等に耳を傾けながら、本人の安心を確保するための関係づくりに努めている	入所前自宅訪問実施(管理者・居宅ケアマネ) 生活環境・日中活動状況など聞きながら本人と談笑するなかで、本人の思いを汲み取れるよう努める。また、スタッフへ情報提供、共有を図っている			
16		○初期に築く家族等との信頼関係 サービスを導入する段階で、家族等が困っていること、不安なこと、要望等に耳を傾けながら、関係づくりに努めている	コロナ感染防止の為、施設内見学ができない状況なので端末を使用し居室や主な配置状況を映像でみてもらっている。又、自宅訪問時に御本人についての困り事、対応方法など聞くことで入所後も本人が不安にならないよう努めている			
17		○初期対応の見極めと支援 サービスを導入する段階で、本人と家族等が「その時」まず必要としている支援を見極め、他のサービス利用も含めた対応に努めている	今後の健康管理について主治医・他医療施設受診について情報共有に努める。スタッフへの情報提供、この施設でいいのか支援方法等入所後の生活支援について知って頂き、入所判断確認する様努めている			
18		○本人と共に過ごし支えあう関係 職員は、本人を介護される一方の立場におかず、暮らしを共にする者同士の関係を築いている	馴染みの関係はできているように思うが、まだ介護されていると感じている方もおられ声掛け等に気を付けている			
19		○本人を共に支えあう家族との関係 職員は、家族を支援される一方の立場におかず、本人と家族の絆を大切にしながら、共に本人を支えていく関係を築いている	今はコロナにより面会もままならない状況であるが、電話予約での窓越し面会、電話にて本人の様子を伝えたりしている			
20	(8)	○馴染みの人や場との関係継続の支援 本人がこれまで大切にしてきた馴染みの人や場所との関係が途切れないよう、支援に努めている	今は外出もできない状況であるが以前は車にて家の近く海岸等へドライブに出かけていた	家族の面会や受診同行など、状況を見ながら入居者が家族と短時間でも顔を合わせる場を作っている。入居者には慣れ親しんだ海へのドライブや郷土の歌「天草小唄」が自然に飛び出したり、男性入居者が自身でさばいた魚を皆にふるまわれるなどこれまでの生活が活かされる場面も用意されている。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
21		○利用者同士の関係の支援 利用者同士の関係を把握し、一人ひとりが孤立せず利用者同士が関わり合い、支え合えるような支援に努めている	知り合いの利用者も多く、いつまでも関わっていける様、会話もしやすい様に座る場所等考え関わりやすい様心がけている		
22		○関係を断ち切らない取組み サービス利用(契約)が終了しても、これまでの関係性を大切にしながら、必要に応じて本人・家族の経過をフォローし、相談や支援に努めている	退所、転所後も相談ある時は助言したい。(転所先への相談・促し等)		
Ⅲ. その人らしい暮らしを続けるためのケアマネジメント					
23	(9)	○思いや意向の把握 一人ひとりの思いや暮らし方の希望、意向の把握に努めている。困難な場合は、本人本位に検討している	自室にて過ごしたい方には無理にはロビーでの生活を強要はしていない。自室にて休みたいと希望されれば特別な事情がない限りは応じている。	入居者の意向は普段の会話の中から聞き取り、ケア会議で共有して支援に反映させている。入居者は自身の言葉で思いを伝える事が出来ており、職員はいつでも受け止め、家族の意向と合わせ必要な内容をプランにつないでいる。	
24		○これまでの暮らしの把握 一人ひとりの生活歴や馴染みの暮らし方、生活環境、これまでのサービス利用の経過等の把握に努めている	利用開始時、情報を読み取りそれぞれの生活歴、趣味等を把握して支援に役立てている		
25		○暮らしの現状の把握 一人ひとりの一日の過ごし方、心身状態、有する力等の現状の把握に努めている	朝のバイタル測定、表情などを観察し、いつもとの違いに気を付けている		
26	(10)	○チームでつくる介護計画とモニタリング 本人がより良く暮らすための課題とケアのあり方について、本人、家族、必要な関係者と話し合い、それぞれの意見やアイデアを反映し、現状に即した介護計画を作成している	月1回の会議時に課題等を話し合っ、より良い支援に向けて意見を出し介護計画に反映させている	ケアマネジャーはカンファレンスでの職員意見を聞き取り、本人・家族の意向を優先したプランを立案している。入居間もない方には前施設などのアセスメントから暫定プランを立て、その後のホームでの暮らしぶりや状態を分析して新プランを立案している。以前は職員を入居者の担当制としていたが、現在は職員が全入居者のプラン作成に関わり、細かい視点で気づきを出し合うようにしている。	

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
27		○個別の記録と実践への反映 日々の様子やケアの実践・結果、気づきや工夫を個別記録に記入し、職員間で情報を共有しながら実践や介護計画の見直しに活かしている	日々の様子は個別記録に記入し、必要に応じて朝の申し送り時に問題等を共有しより良い支援に繋げている		
28		○一人ひとりを支えるための事業所の多機能化 本人や家族の状況、その時々生まれるニーズに対応して、既存のサービスに捉われない、柔軟な支援やサービスの多機能化に取り組んでいる	利用者の病院付き添いで高齢な御家族に配慮し一緒に車に乗っていただき同行してもらったりしている。同グループのデイサービスの車を使用することもあり連携して行えている		
29		○地域資源との協働 一人ひとりの暮らしを支えている地域資源を把握し、本人が心身の力を発揮しながら安全で豊かな暮らしを楽しむことができるよう支援している	今はコロナ禍により地域の催し物への参加できていない。地域の方が育てた花等散歩しながら見に行かせていただいている		
30	(11)	○かかりつけ医の受診支援 受診は、本人及び家族等の希望を大切に、納得が得られたかかりつけ医と事業所の関係を築きながら、適切な医療を受けられるように支援している	内科、眼科、歯科それぞれの病院よりかかりつけの先生より往診に来ていただいで診ていただいている。症状に変化あった場合は付き添い受診をしている。また、入所前にかかれていた医療機関への受診にも繋げている。	入居時に希望する医療機関が訪問診療が可能であるか聞き取り、そうでない場合は対応可能な地域の医療機関を紹介している。専門医の受診については、家族の対応としており情報提供書を作成し結果を共有している。職員は食事や排泄、日頃の関わりから入居者の異常の早期発見に努め必要があれば受診を支援している。感染症への対応から、居室や共用空間は日々の掃除や換気、消毒に努めている。	
31		○看護職との協働 介護職は、日常の関わりの中でとらえた情報や気づきを、職場内の看護職や訪問看護師等に伝えて相談し、個々の利用者が適切な受診や看護を受けられるように支援している	日常生活に変化を感じた場合は早めに看護師に伝え対応をお願いしている。必要であれば受診できるように支援している		
32		○入退院時の医療機関との協働 利用者が入院した際、安心して治療できるように、又、できるだけ早期に退院できるように、病院関係者との情報交換や相談に努めている。あるいは、そうした場合に備えて病院関係者との関係づくりを行っている。	急変時、入院時には付き添いし申し送りを行っている。入院中も医療連携室の担当者と連絡を取り、退院前にはzoomや電話でのカンファレンスにも参加している		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
33	(12)	○重度化や終末期に向けた方針の共有と支援 重度化した場合や終末期のあり方について、早い段階から本人・家族等と話し合いを行い、事業所でできることを十分に説明しながら方針を共有し、地域の関係者と共にチームで支援に取り組んでいる	入居時に説明を行ったり、病状が悪化した場合はその都度、主治医・家族と話し合い今後の方針を決めている。また、話し合いの結果をスタッフ間で共有しケアにあたっている	現在はホームに出来得るところまで支援する事としており、入居時に方針を伝えている。重度化や病状が悪化した場合は、その都度主治医を含め家族と話し合いの機会をもち、今後の方向性を決定している。この一年、お一人の最終を支援した際は、コロナ禍にあり家族との対面も困難であったようである。支援後は本人を偲びながら振り返りの機会が持たれている。	ホームに出来得る最終の支援が行われており、今後は職員の意向を聞きながらメンタル面も含め、必要な研修の機会を持つことも必要と思われる。
34		○急変や事故発生時の備え 利用者の急変や事故発生時に備えて、全ての職員は応急手当や初期対応の訓練を定期的に行い、実践力を身に付けている	定期的な訓練は行われていないが予測された急変については事前に看護師より指導を受けている		
35	(13)	○災害対策 火災や地震、水害等の災害時に、昼夜を問わず利用者が避難できる方法を全職員が身につけるとともに、地域との協力体制を築いている	勉強会や防災訓練を通して避難方法を身につけている。地域との協力体制については現在ではできていない	消防署や防災業者の協力を得、1階台所を出火想定した火災避難訓練を実施している。ホーム内の安全管理は朝から環境チェックとして取り組んでいる。地域との協力体制は現在連携には至っておらず、今後の課題としている。	ハザードマップに水害と土砂災害が少しかかる地域であると示されている。今後は火災に加え自然災害についても意識を持って取り組まれることを期待したい。また、運営推進会議を活用した訓練の開催も有効と思われる。
IV. その人らしい暮らしを続けるための日々の支援					
36	(14)	○一人ひとりの尊重とプライバシーの確保 一人ひとりの人格を尊重し、誇りやプライバシーを損ねない言葉かけや対応をしている	人格を損なわないよう注意する際「駄目」等否定的な声掛けをしないよう心がけている	呼称は苗字にさん付けを基本とし、一人ひとりの尊重、人格を否定した声掛けをしない事など周知を図っている。居室へ入る際は在室の有無に関わらず、ノックや了承を得る事としている。おしゃれや身だしなみは本人の好みを尊重し必要なサポートを行っている。また、化粧水など保湿剤を使用される方には、不足しないよう心掛けている。散髪は訪問にて支援されている。	
37		○利用者の希望の表出や自己決定の支援 日常生活の中で本人が思いや希望を表したり、自己決定できるように働きかけている	利用者の話しを傾聴し、希望を聞き可能な限り沿うよう支援している。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
38		○日々のその人らしい暮らし 職員側の決まりや都合を優先するのではなく、一人ひとりのペースを大切に、その日をどのように過ごしたいか、希望にそって支援している	職員一人の考えで物事を決定しないで、その日の勤務者で話し合いながらケアにあたっている。その日の気分でどう過ごしたいか		
39		○身だしなみやおしゃれの支援 その人らしい身だしなみやおしゃれができるように支援している	入浴時の着替えにはその方に似合う服を準備し、本人の希望があれば好きな服を着替えて頂いている。散髪も希望時や気配りし理容師より訪問できて頂いている		
40	(15)	○食事を楽しむことのできる支援 食事が楽しみなものになるよう、一人ひとりの好みや力を活かしながら、利用者と職員と一緒に準備や食事、片付けをしている	厨房からの食事支援を行っているので好みのものを提供するの難しいが行事を通して好きなものを提供できるよう心がけている。おやつを作る時はたまにだが一緒に行っている。食事作りは一緒にはできていない	有料施設厨房で調理されたものに職員がアレンジをしたり盛り付けを工夫しながら提供している。個々の嚥下力に応じキザミ食なども準備している。昔ながらの器を使用することで、入居者にとっては安心感につながるようである。入居者が日々の調理に関わる機会は難しいが、テーブル拭きやおやつ作り、野菜の収穫、保存食作りなど個々に応じた出番が用意されている。	あらたまった検食簿という形ではなくとも、味や量、盛り付け、入居者の発せられた一言など、今後活かせるようなコメントを記録に残すことも良いと思われる。入居者の楽しみとなる食事支援が継続されるよう検討いただきたい。
41		○栄養摂取や水分確保の支援 食べる量や栄養バランス、水分量が一日を通じて確保できるよう、一人ひとりの状態や力、習慣に応じた支援をしている	食べやすいよう一口大にしたり、野菜が嫌いな方には声掛けし促している。量については加減し一人一人に合った量にしている。水分も多く取れるよう心がけている		
42		○口腔内の清潔保持 口の中の汚れや臭いが生じないよう、毎食後、一人ひとりの口腔状態や本人の力に応じた口腔ケアをしている	出来ない方に対しては毎食後、付き添って口腔ケアを行っている。できる方は声掛けし、促している。口腔内の異常に気付いた時は訪問歯科に繋いでいる		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
43	(16)	○排泄の自立支援 排泄の失敗やおむつの使用を減らし、一人ひとりの力や排泄のパターン、習慣を活かして、トイレでの排泄や排泄の自立にむけた支援を行っている	排泄表を通してパターンを確認し、その方に応じた対応を行っている。声掛けして誘導し失敗やおむつの使用を減らすよう心がけている	日中は可能な限りトイレでの排泄を支援し、リハビリパンツを使用される方が殆どであるが、パットを併用しながら布パンツで過ごされる方もおられる。ポータブルトイレを夜間のみや昼夜通して使用される方がおられ、使用後はその都度清潔に管理している。排泄用品はホームで準備しており、適切な用品や支援方法など職員間で共有し個別支援の充実を図っている。	
44		○便秘の予防と対応 便秘の原因や及ぼす影響を理解し、飲食物の工夫や運動への働きかけ等、個々に応じた予防に取り組んでいる	毎日ではないがテレビ体操やリハビリ体操を行っている。便秘の改善に、水分摂取を促したりヨーグルトや食物繊維の多く含んだ食べ物をおやつ等に提供している		
45	(17)	○入浴を楽しむことができる支援 一人ひとりの希望やタイミングに合わせて入浴を楽しめるように、職員の都合で曜日や時間帯を決めず、個々にそった支援をしている	なかなか希望に応じることは難しいが汚染されている時は対応している。今は、曜日・時間は決まっているが「気持ちよかった！」と笑顔でお礼を言われている。	月曜から土曜まで入浴の準備を行い、週2～3回、午前を中心に支援している。2名介助で可能な限り浴槽に浸かってもらえるようにしているが、広い一般浴槽であり安全面を考慮し、シャワー浴が中心の方もおられる。その際はかけ湯などにより冬場は特に湯冷めなどないよう配慮している。現在、職員の会話による誘導で、拒否をされる方もおられず、スムーズな入浴支援となっている。シャンプー類はホームで準備しており、季節湯(菖蒲・柚子)は全員が楽しめるよう3日間実施している。	浴室は日々掃除を徹底しており、今後は洗剤については安全面から別の場所で管理する方が望ましいと思われる。取組に期待したい。
46		○安眠や休息の支援 一人ひとりの生活習慣やその時々状況に応じて、休息したり、安心して気持ちよく眠れるよう支援している	日中「寝たい」と希望される方へは自室にて休んでいただいている。夜間、眠れない方へは眠剤を与薬しているが、日中も眠気強い方にはなるべく与薬しないよう心がけている		
47		○服薬支援 一人ひとりが使用している薬の目的や副作用、用法や用量について理解しており、服薬の支援と症状の変化の確認に努めている	内服薬の説明書を読んで理解し、支援している。日常的に身体の変化の確認に努めている。定期往診時に主治医に相談もおこなっており、薬局とも連携がとれている		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
48		○役割、楽しみごとの支援 張り合いや喜びのある日々を過ごせるように、一人ひとりの生活歴や力を活かした役割、嗜好品、楽しみごと、気分転換等の支援をしている	時々、皆さんが参加できる風船バレーをして楽しまれている。健脚な方で職員と一緒に厨房へ食事を取りに行かれている、行事も楽しんでいただけるよう努力している		
49	(18)	○日常的な外出支援 一人ひとりのその日の希望にそって、戸外に出かけられるよう支援に努めている。又、普段は行けないような場所でも、本人の希望を把握し、家族や地域の人々と協力しながら出かけられるように支援している	苑周りの散歩や支援は時々できているが、今は面会・外出制限もあり家族や地域の人々との協力は難しくできていない	コロナ禍にあるが、入居者にとってその季節を戸外で楽しむこと、家族と一時でも過ごすことの重要性を十分認識し対策を施し個々に応じた外出を支援している。地区の方が植えられた紫陽花やひまわりロードへの散歩や、地域の寺へお参りし住職の話を聞く機会、法人代表者宅の庭先でお茶タイム、野菜の収穫なども恒例となっている。また、馴染みの海へのドライブ、歩きや車でドライブイン(天草村)にジェラートを楽しむなど入居者に好評のようである。家族の協力により墓参も実現しており、このような機会は本人の安心につながることから大切にしていきたいと代表者は語っている。様々な外出支援の様子は広報紙でも紹介されている。	訪問当日は好天であり入居者は2階から玄関先に降りて、車の往来を見ながら外気浴を楽しんでいた。歌も飛び出しいつもの光景であることが窺えた。、感染症終息後の新たな取組が期待される。
50		○お金の所持や使うことの支援 職員は、本人がお金を持つことの大切さを理解しており、一人ひとりの希望や力に応じて、お金を所持したり使えるように支援している	多少、お金を持っている方は病院受診後等に自己にて買い物し苑へ戻って来られる。基本的に金銭は事務所預かりとし、希望時は利用者にかわり職員が買い物代行している		
51		○電話や手紙の支援 家族や大切な人に本人自らが電話をしたり、手紙のやり取りができるように支援をしている	携帯電話を持っている方が一人はおられ電話されている。御家族より声が聞きたいと言われた場合は応じている。手紙も職員が声掛けながら書かれる方もおられる		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
52	(19)	○居心地のよい共用空間づくり 共用の空間(玄関、廊下、居間、台所、食堂、浴室、トイレ等)が、利用者にとって不快や混乱をまねくような刺激(音、光、色、広さ、温度など)がないように配慮し、生活感や季節感を採り入れて、居心地よく過ごせるような工夫をしている	加湿器・空気清浄機・エアコンを使って共有空間づくりを行っている。時間をみて換気にも気を配っている。陽当たりが良いため眩しいときはカーテンを閉めて対応。季節感のある飾り付け等を工夫している	玄関をはじめホーム内には地域から届けられたり、職員が持ち寄った季節の花が飾られている。ホームは2階にある事から採光も良く、室温や眩しさなどには入居者の声も聴きながらカーテンやエアコンを調整しながら居心地よく過ごせるようにしている。食事以外は居室で過ごされる方もおられるが、殆どがリビング食堂でテレビを見たりレクレーションへの参加や入居者同士、入居者と職員の談笑などメリハリのある時間を過ごされている。厨房からの食事提供が主であるが、職員が一品を作ることもありリビングには台所からの音や匂いが伝わってくる。	屋食後は施設長も加わり歌や踊りなど賑やかなホームの日常を見る事が出来た。職員の関わりが何より入居者の安心につながる事を共有しており、変わらぬ支援の継続に期待したい。
53		○共用空間における一人ひとりの居場所づくり 共用空間の中で、独りになれたり、気の合った利用者同士で思い思いに過ごせるような居場所の工夫をしている	テーブル席やソファにて過ごされることが多く自由に場所を選んで生活して頂いている。食事以外は自室にて過ごされている方もいる		
54	(20)	○居心地よく過ごせる居室の配慮 居室あるいは泊まりの部屋は、本人や家族と相談しながら、使い慣れたものや好みのものを活かして、本人が居心地よく過ごせるような工夫をしている	馴染みのある家具等持参されている方はクローゼット設置により少ない。転倒事故等ないようにベッドの配置にも工夫している	以前の医院病室を落ち着ける雰囲気となるよう内装などを行い居室に活用されている。多床室であったことから十分すぎる広さである。有料など他の施設から入居される場合は、一度必要なものを確認して持ち込んでもらっている。タンスなどの持ち込みは少なく、衣類や使用しない物品は備わったクローゼットに収納されている。家族の写真や趣味の和歌を詠んだものをはじめ、復興した熊本城が掲載された地方紙を掲示された部屋も見られた。また、使い慣れた化粧品や置時計など必要な品が手の届く範囲に置かれている。	開放感のある居室のベランダに出ると、車の往来や樹木の開花など季節の変化を楽しむことができる。今後も安全面に配慮しながら外気浴の機会としても活用されることを期待したい。また、感染症の状況を見ながら、家族が居室内の整備を一緒に出来るような機会を持たれることを期待したい。その旨を家族へも発信しておくことで安心につながると思われる。
55		○一人ひとりの力を活かした安全な環境づくり 建物内部は一人ひとりの「できること」「わかること」を活かして、安全かつできるだけ自立した生活が送れるように工夫している	トイレや居室の入り口には表札をかけ分かるようにしている。廊下が長いので途中で椅子を置き休憩ができるようにしている		